Masami EYAMA*: Dissertation on Harmonic Landscape

1—序論

自然景観を対象として発展した造園は、周知のようにその対象を文化景観にまで拡大し、現代では広義の景観の造成を基調としている。この段階において基本問題の一つになるのは、自然と人工との相互干渉であり、両者によって構成される景観の調和不調和の問題である。

この点に関する調査研究はすくなくないが、その本質に対する究明には尚幾多の問題を残している。この問題が最も重要である国立公園の分野においても、一応の段階で検討がとどまっている嫌がある。私はこの小論で従来の検討から一歩進んで本質の究明を試みたいと考える。

調和景観の本質を究明するには、自然景観乃至原始景観を最も尊重する国立公園（自然公園）の分野を基調として、検討をはじめのが最も妥当な順序である。国立公園の工作物に対する基本的な考え方は、言うまでもなく自然景観の破壊を必要最小限度にとどめることである。そのために可及的に自然景観らしい状態を保持する努力が払われてきたのは周知のところである。まず第一に挙げられる点は、自然景観に対する工作物の人工的な影響をすくなくすることである。そのための技法は多種多様であるが、これを大別すると、工作物の色彩を例えば屋根の色を緑系統にして夏季の自然に一致させる保護色的な技法、工作物を植栽でかくし自然景観の維持をはかる方法、或は工作物を主要展望地点乃至主要観光ルート（道路、航路等）から望見されない位置を選定する技法、更にそれが不可能な場合においても工作物の占める立面積の最も小さい面を主要地点にむけて、可及的に自然景観に対する人工的な影響をすくなくする技法である。以上類別される技法はいずれも、自然景観を公園として人間が利用する場合不可欠な工作物（利用施設）を自然の中に導入する場合に、できるだけその影響が目立たないようにするための手段であり、その基調は自然景観という観念であり、この場合には調和景観という観念は全く存在していない。ここでは自然と人工は相容れないものとして把握され、その故に工作物による景観の改変を極力防止する努力がみられるにすぎない。

この段階が国立公園における自然と人工との関係の第

一段階であり、それは言うまでもなく国立公園における基本的な立脚点であるが、しかし国立公園においてもこの段階から一歩進めて、自然と人工との調和をはかることは、むしろ好ましいものとして肯定されている。この段階においてはじめて本論の主題である調和景観に対する考察になるが、従来の国立公園における取扱は、基本的には第一段階における自然景観の尊重という点に立脚しながら、具体的な技法としては第一に自然景観（自然環境）と調和をはかるために、環境と関連をもつ材料、色彩の活用、即ちその附近に産する石材や丸太を利用して工作物をつくることである。第二には工作物に自然らしさを生むために、材料に必要以上の若干の大きさを加える技法である。自然に対する把握の仕方は色々であるが、国立公園思想では自然を人間より大きなものとしてつかむ。この思潮が基調になつて、小さな材料をつかった工作物には人工らしさが肯定され、反対に太い材料の工作物には、何かしらどつしりした自然らしさが肯定されるのである。但しここで強調しておきたいことは、工作物の材料に必要以上の大きさを要するといつても、それが極端に大きくなるとかえつて不自然になり不調和になる。そこには自ら限度があるが、どの程度のときに最も効果的であるかについては、改めて検討する問題であり別の機会にゆずるが、ここではただ材料に必要以上の若干の大きさを加えることによつて、自然らしいつまり自然と調和した状態を生む点を指摘するにとどめる。国立公園では自然と人工に関連して、以上の二つの段階のほかに、工作物に対する条件として、単純（Simplicity）であることが強調されている。自然景観は単純でなくてむしろ複雑であり、複雑であるが故に単純な把握形式が生れるとも言えるが、工作物の場合の複雑さは、それが直ちに人工的な感覚に直結するために、人工らしくない感覚の尊重から、この点が主張されてきたのである。と同時に Simplicity は一般的に言つて design の基調でもあるからである。

以上の諸点によつて従来国立公園で考えられている自然と人工との関係、更に自然と人工による調和の概念は明らかになるが、しかし以上の諸点だけでは調和景観の本質は把握されていない。

* 栃木県観光課長：Chief of Sight-seeing Sec.,
Tochigi-Pref.

序論では調和景観という言葉が漠然と使用されてきたが、その本質を究明するまえに、調和景観の字義とその内容を明確にしておく必要がある。ここで調和景観というのは Harmonic Landscape, Harmonische Landschaft に相当する言葉である。この言葉は自然景観 (natural landscape) に対しても亦人工景観 (artificial landscape) に対しても使用され、両者が結合する複合景観 (compound landscape) についても使用される。文化景観 (cultural landscape) という言葉は一般には自然景観を原始景観 (primeval landscape) として把握したときに対比的に考えられる言葉であるが、自然景観の中にも文化景観があり、ここでいう人工景観や複合景観は言うまでもなく一般に言う文化景観に包含される。調和景観はあらゆる景観概念の中に指摘されるが、造園学の分野で最も重要なのは自然要素と人工要素が複合した場合の調和景観の問題である。局部的な都市景観における調和景観の問題も、都市計画の分野では極めて重要であるが、ここではほとんど考察を加えない。更に原始景観や自然景観(動物を含む) それ自身に対する調和景観の問題についても考究する余地があるが、ここでは自然景観はそれ自身が一見調和景観であるという概念を一応肯定しておくことにする。従つて本論で追及する調和景観の問題は、自然と人工との交渉による景観の調和性の問題に限定される。

国立公園における前述の技法のうち、工作物に対して自然環境から材料をえらぶ方法は、自然と人工による調和景観を造成する一つの手段であることは言うまでもない。私たちは環境の材料を生かした工作物が、美しい調和景観を構成している事例を挙げるに苦しめない。例えば中部アフリカや中東地方の砂漠地帯によくみられる土の家と環境との干係の如き、材料と言い、色彩といい、文字通り自然と人工による調和景観の好例である。しかしながら調和景観の本質問題は、この種の段階から更に基本的に自然環境とこれに導入される工作物との関係から出発する必要がある。既に指摘したように純然たる自然景観は、一応の考え方ではそれ自身が一つの調和景観であるが、これに人工になる工作物が加えられると、景観の有機的な平衡が破れ、その結果一見調和景観でなくなる場合が多いと考えられている。この種のケースが多いから、自然景観を基調とする調和景観の問題が、造園学殊に自然公園において大きな課題になるのである。しかも自然景観に導入される人間の工作物は、近代生活の進展と共に、今後益々多くなる傾向にあるから、調和景

観の問題は極めて重要な課題になる。ここで問題になるのは、調和景観という場合の「調和」の内容であるが、かつて調和景観を論じた Erlangen 大学の R. Gradmann 教授は、美学的な調和観は景観性の一面ではあるが、それはあくまで本質的なものでなく、景観の調和不調和の問題は各景観要素の相互関係に有機的な性質が存在し、その機能が完全であるか否かに起因すると主張した。動物まで包含した自然景観がそのまま調和景観であるのは、各要素間に有機的な干係が肯定されるからで、この意味では Gradmann の主張は了解されるが、自然景観に対する人間の工作物の導入、それから導かれる調和不調和の人間感覚は、両要素間の有機性の問題の他に、人間独自の調和感に対する尺度の存在が指摘されるのである。調和景観の本質を追及するには、恐らく景観心理学とも言うべき分野にはいるはずの、人間のもつ調和感の検討が根柢である。ここに言う人間独自の調和感には、二つの特性がその基調になつている。私はここでその一つを仮に歴史性とよび、他の一つを慣習性とよぶことにする。

第一に挙げた歴史性による調和感というのは、自然景観の中につくられている古い工作物と自然の環境とが作り出す景観には、何かしら着きがついて、調和しているように考える人間心理を指すのである。自然の中に中世の古城が聳えていたり、森の中に古い寺院や神社がある場合に、私たちはそこに一つの調和感を肯定する。しかもこれらの立地は自然環境のすぐれた地点を占有しておりながら、工作物が古いという点で不調和を感じないのである。私たちは日本の風景の中で、古い寺院が自景観を破壊していると言う主張を、聞くことがない。寺院をとりまく自然が破壊されたという嘆きはよく聞くが、古い寺院自身が景観を破壊していると言う主張は聞かない。この傾向は国立公園における自然保護行政にも明瞭に指摘される。過去につくられた工作物を、そのまま肯定する傾向がそれである。日光の東照宮は日光国立公園の重要な存在として肯定され、それが日光の自然景観を破壊しているとは考えられていない。今仮に東照宮のような極端に華麗な工作物を国立公園の中に新築する場合を考えると、自然景観の保護を念願する国立公園がこれの否定することは必至である。にもかかわらず現存する東照宮は、すでに 300 年の歴史と、これを取りまく老杉林と共に私たち人間の心の中に一つの調和景観として肯定されている。私の指摘する歴史性による調和景観の本質はこの意味である。

第二にあげる慣習性というのは、私たち人間の心理の

(1) 江山正美、自然景観の文化性、造園雑誌、第20巻第1号、1956

(2) MOORE, W. R. Progress and Pageantry in Changing Nigeria, The National Geographic Magazine, Sept. 1956, p.p. 343-3 345&355

(3) GRADMANN, R.; Das harmonische landschaftsbild, Zeitschr. Gesellsch. Erdk. Berlin, 1924, s.s. 129-147.

中にある工作物に対する自然さと不自然さに対する尺度によつて、景観に対する調和性が左右される点を指すのである。私たちの頭の中には、それぞれの工作物の自然らしさに対して一般的に一つの標準が存在している。これも根本的には第一にあげた歴史性と密接な関連をもっているが、この尺度は簡明に言えばそれぞれの工作物に対して、私たちのもっている既成概念であり、これにもとづいて具体的に肯定される形態や色彩の心像である。つまり特定の工作物に対して、私たちが不自然さ突飛さを感じない場合の尺度、標準を意味する。従つてこの尺度に合致した工作物が自然景観の中に導入されたときには、不調和という感覚を生じない結果になる。

工作物に対する自然らしさの感情は、その工作物の形態なり色彩なりが、過去において幾回となくつくられ、時間的な過程の中で、その形態が私たちの頭の中に固定され、いつのまにか不自然さ突飛さの感情を喪失してしまつた場合である。この場合時間的な要素が加わるために、第一にあげた歴史性と密接な関係が指摘される。ただ両者の相違点は、歴史性の場合が必ずしも現代と機能的な干係がないが、慣習性の中には歴史性のもつ時間的な要素が肯定されると同時に、それが機能的にも現代とつながっている点である。第二の場合の好個の事例としては、道路、橋梁があげられる。この両者は時代と共に進歩して止まないが、それでいて私たちの観念の中に、既にひとつの固定した概念が存在している。道路や橋梁は私たちが自然景観を利用するためにも不可欠な施設で、しかもアメリカに発達した国立公園思想(National Park Idea)の中でも、広大な自然環境の中に道路(軌道は否定)だけは肯定されている。自然景観を破壊するという点では、点的な存在の宿舍などよりも、はるかに大きな力をもつにもかかわらず、われわれはそれをむしろ当然なものとして肯定し何の疑義もさしはさまない。ただ残されている問題は自然景観の破壊を可及的にすくなくするための路線の選定、路傍の修景等の技術的な面にすぎない。工作物に対するこの種の考え方は、道路橋梁に限らずすべての施設について指摘される。私たちの観念の中には、自然景観の中につくられる宿舍その他の工作物についても、不自然でないという尺度が、漠然ながら存在している。私が第二にあげる慣習性というのは、この種の観念を指すのである。

調和景観に対して以上指摘した歴史性と慣習性の二つの概念を、更に追及してその本質を明らかにし、調和景観の本質を考察するのが、この小論の主題である。まず第一にあげた歴史性が調和景観の本質であるか否かの問題から検討する。私たちの一般的な観念の中には、奈良の古都に今尚残されている寺院干保の建築が、環境との間に一つの調和景観を構成しているように考えている。

なるほど1,000年を超えるこれらの建築は、幾たびか改修されながらも今日までつたえられ、永い年月の風雪に堪えて歴史の衣をかさねながら特殊な落着きと魅力をたたえている。そこには一つの調和感が否定できない。この点には誰も疑問をさしはさまないであろうが、本質的には極めて重要な問題をのこしている。現在奈良博物館に所蔵される海竜王寺(平城京)の小塔(もと海竜王寺西金堂内に安置)は、僅か13尺の模型式のものであるが、屋内にあつた故に改修されることなく今尚昔時の姿を伝えており、当時の様式を示す点で建築学上からも貴重な資料である。しかもこの小塔は屋根の勾配⁽⁴⁾と言ひ、塔全体が発渾とした生気をたたえている。奈良の都に多くの寺院建築が建設された当時を想像すると、それは凡そ突飛な新建築であり、そこには今日私たちが感ずるような調和景観は存在していなかつた。これらの寺院建築は、例えば、その中の五重の塔についても、現存する最古の塔、印度のサンチーのスツーパーから出発して、中国、韓国の塔を経て、わが国の三重、五重の塔が生れるまでには、関連した形態の歴史があり、わが国で突然に生れたものではないが、それにしても在来のわが国の当時の建築に対しては、全く対比的であり、斬新な建築であつたことは否定されない。それは塔ばかりではない。当時の一連の寺院建築について言える共通の特色である。奈良の新京に多くの寺院が聳えた当時は、文字通り革命的な新建築の乱立であり、そこには今日私たちが感ずるような調和感はなかつたと言つて差支えない。これらの寺院建築は今日わが国に導入されつつある尖端的な新建築以上に、新しい生気に溢れた建築であつた。当時の庶民の住居と対比して、全国にみられる大きな屋根の堂堂とした寺院建築は、今日でこそ永い歴史の中に没して落着いた存在と化し、日本風景の特色にさえなりきつているが、それが全国に建設された当時は、環境との調和の点で、今日とは凡そ正反対の対比的な存在であつたといえよう。当時これらの存在を肯定したのは、人間のもつ権力、文化、宗教などの偉大なものに対する尊敬、帰依、肯定の心理にほかならない。人間のもつ高い所へのあこがれ、崇高なものに対する敬慕の心理が宗教と結ばれて、回教寺院には細長いミナレーがあり、キリスト教の会堂には高い鐘塔があるのと同様であり、しかもそれに対して何等の不自然さも感じなかつたであろう。しかしながら大きな寺院建築を伴つた当時の景観が、従来とは全く革命的な新しいものであり、不調和な景観であつたことは否定されない。斬新な寺院建築も時代の経過と共に、歴史的な味を加え、現代では過去のものに対す

(4) (i)清水一；家のある風景、暮しの手帳38号, 1957, spring, p.127

(ii)日本建築学会編：日本建築史国集, 1949, p.30

る魅力がそれを一段と価値づけて、そこに一種の落ち着きを生み、景観として調和性を生んでいる。これが歴史性による調和景観の本質である。今日一見不調和と考えられるような斬新な建築も、それが否定されずに（不調和でしかも内在的に欠陥のあるものは歴史の中で没却される）、時代の流れの中に残存し得たら、いつかの将来には、歴史性をもつ調和景観を育成するのである。

第二にあげた慣習性にもとづく調和景観は、私たちの心理の中に存在するそれぞれの工作物に対する「らしさ」の概念を基調とする調和感に立脚するのである。国立公園の自然の中に建つロッジやホテルという概念の中にも、私たちは漠然ながらそれらの形態に対する心像をもっている。この概念を形成する素因は、数多くの国立公園の中に現存する形態の中から、抽出される普遍性のある形態である。勿論この種の概念には若干の個人差はあるが、同じゼナレーションの人なら、比較的に共通な概念を形成している。この概念は現存する形態の中から共通性をもとにして形成されるために、多くは近い過去の形態が概念化されることになる。我々のもつ「らしさ」という概念は多くの場合、現代に生きている近い過去の形態が生み出す観念である。その形態には「突飛さ」「不自然さ」がないために、自然景観の中にこの種の工作物が導入されても、そこに一つの調和景観が肯定されるのである。従つてここで言う慣習性による調和景観は、本質的には現代生きている歴史性による調和景観とすることができる。しかしながら現代はおそろしいほどの速さで、人間のもつ「らしさ」の観念を改変しつつある。交通機関の急速な発達によつて、世界の文化、技術は広汎に交流錯さうしつつある。工作物に対する材料や加工も、日急速な発達をする。近い過去に指摘された地方的な特色は、次第に影をひそめ、混沌ともいえるほどの状態を呈している。人間の生活様式においても同様である。極論すれば昨日突飛だと考えられた形態が、今日は慣習性を獲得して不自然さを失い、自然らしさを感じさせるのが現代である。家族制度を強調し、垣根をめぐらしたわが国の一戸建の住宅形式に、らしさを肯定し、欧米風のアパート生活を夢想だにしなかつたわが国に、終戦後全国的に拡がった三四階建のアパート建築は、わが国の文化景観に一つの革命をもたらしした現象である。多くの若いゼナレーションは、この生活様式に魅力を感じ、それがやがて妥当性のある「らしさ」をはぐくむであろう。このらしさは五重塔や寺院と同様にやがて一つの調和景観を肯定させることになる。私たちはヨセミテのアワニーホテル、マウントフツドのチンバーラインロッジ、エローストンのオールドフェイスフルイン、上高地の帝国ホテルなどに、自然景観の中のロッジとしての「らしさ」を感じ、そこに調和景観を肯定するのである。

る。しかしそれと共に他方カナダのレークルイズホテルやリオデジャネイロのレゲンダガバアホテルにも調和景観を否定しない。このように考察してみると新しい時代の、しかも合理的な生活感情に立脚する新建築は、それ自身が慣習性を獲得することによつて、調和景観が構成されるのであり、この面からすれば特定の自然環境に対して調和景観を構成するための工作物に特定の様式や形態は存在しないと言うことができる。それは道路という一つの工作物が、如何なる自然環境の中でも、その形態の必然性とここに言う慣習性によつて、常に不調和な感覚を伴わない事実と同様である。

3—結論

調和景観の本質について、以上私は歴史性と慣習性による人間心理を基調として考察した。この二つの基盤に立脚すると、まず第一に永い歴史を有する工作物は自然環境の中に落ち着きによる調和景観を構成し、第二に慣習性による「らしさ」の感情も亦環境との間に調和景観を造成することになる。しかしながら第一の場合は複合景観造成当初の時代においては、現代肯定されるような調和感は弱いものであつた。むしろそれは当時の人間が渴望し羨望する尖端的な文化の所産であつた。この意味からその存在は積極的に肯定されるが、環境に調和した落ち着いた景観としては肯定されないのである。この点は第二の慣習性の場合も全く同様で、工作物が慣習性を生じ、「らしさ」を身につけるまでは、新時代の文化の所産にすぎず、その意味では肯定されても、調和景観としては肯定されないのである。従つて調和景観の本質は固定した存在ではなく、文化の進展に伴つて変動する人間感情と共に、常に動いている存在である。言いかえるなら、それぞれの時代の尖端が生み出す形態の中で、たとえそれが出現の当初は不自然らしく見えても、やがてその中に人間の共感が得られるものは、慣習性を把握して、それぞれの時代に生きて調和景観を構成することになる。調和景観の基底をなすものは、それぞれの時代において多くの人が渴望し、共感する造形に他ならない。

しかしながらこの結論については、なお若干の問題を検討する必要がある。上述した考察によると、地域的な差異をもつ自然環境に干渉なく、それぞれの時代を代表する造形は常に調和景観を構成することになり、すぐれた造形なら如何なる環境においても肯定されることになる。この主張は現代指摘される一つの主張であるが、その反面、自然環境が異なるにつれて、調和景観を構成する環境と造形の間には動かすことの出来ない決定的な因子があり、造形に対する環境の制限が存在するように考えられている。事実世界各地の過去の造形には、各地の

自然環境が異なると同様、その造形にもそれぞれの特徴があり、その特色が地域毎に「らしさ」の感覚を生んでいることは争えない。調和景観における造形の制限は、この事実⁽⁵⁾に立脚する主張であるが、この主張には若干の混乱が介在している。環境特に風土による造形の相異は、動かすことの出来ない事実であるが、しかしながらこれを歴史的にみると、時代によつて異なる造形が同一の環境の中に肯定されることも事実である。一見矛盾するこの事実が意味する調和景観の問題は、自然環境の如何ではなくて、その中に導入される造形に時代的な統一があるか否かの問題に帰着するのである。

ゲートがスイスのベルンを訪ねたのは1779年であった。そのときゲートはベルンが世界で一番美しい街だといつたが、現代でもベルンは街全体が中世の造形で統一されている。統一された造形の美しさと、中世に対する現代人の郷愁の故に、ベルンは世界の代表的な観光都市になつてゐる。オーバーラントのアルプスの自然環境とベルンの中世的な造形との間に動かすことの出来ない調和要素が肯定されるからではない。現代を排撃した中世的な造形（この場合造形的には必ずしも中世でなくてもよい）による統一即ち多くの現代都市にみられる造形の時代的混乱のない点が、ベルンの特色である。同様な主張の出来る街は、ヨーロッパにはすくなくないが、パリ⁽⁶⁾も亦既に完成された都市である。ロココ、バロコを終末とするゴシック以来の造形が支配的であり、新時代の建築が侵入する余地のない点が、パリーの美しさであり、調和景観である。しかしそれは歴史性を多分に加味した美しさであり、現代生活の立場からみると幾多の不満が否定されまい。にもかかわらずパリーが現代生きて

いるのは、それでいて近代生活に充分な条件をなお具備しているからにすぎない。

現代わが国の自然環境、特に自然公園の中における過去の造形は、近い過去まで主として木造の一応統一のある造形をもつていたところがほとんどであるが、近代生活特に冬季の生活条件を満たすために、文化の進展に伴う新しい建築材料による新しい造形が急激に導入されている。このためにわが国の自然公園は文字通り造形の混乱を呈し、この故に景観の調和性は著しく破壊されつつある。従来の日本古来の造形を温存しながら、なお且つ新しい建築材料を活用して、現代生活の条件を満たす工夫の余地がないとは言えないし、又一面それは望ましい一つの動向でもあるが、近代の動向は新しい造形の急速な侵入が目立っている。しかしながら混乱の過渡期がすぎ、やがて慣習性を獲得した近代の造形で統一が完成されるときには、新しい調和景観が生れるのである。言うまでもなく造形の伝統は生かされなければならぬ。五重塔がわが国で日本的な造形を完成したように、近代建築も亦日本的な風土と伝統の轍からのがれることは不可能である。しかしながら人間のもつ伝統の宿命は、過去の造形とは全く異なつた形で、一見隔絶した存在としてあらわれる場合がすくなくない。落葉した銀杏並木を前景として、東京都庁（丹下健三）の大きな壁面をみていると、私は日本建築の障子と庭木の伝統を見るが、両者の形態には大きな隔りが存在している。過去にみられた造形の地域的特色は、近代文化の普遍性によつて一見失われようとしており、私たちは現代の心理に立脚して新しい景観を造成しているが、風土に相異があり、人間自身に差異がある以上、いつの時代の調和景観も地域的な相異を全く否定することは不可能である。文化の交流による一時的な混乱はあつても、人間の時代感覚は伝統の轍の中でそれぞれの時代に、それぞれの地域に新しい調和景観の造成を繰り返すのである。この動向の中に調和景観の本質が指摘される。（1957.7.15.）

(5) SHOR, J. & F. ; Surprising Switzerland, National Geographic magazine, Vol. CX, No. 4, Oct, 1956, pp, 145—6

(6) 安田臣：西欧の旅、建築文化、Vol. 11, No. 6, June, 1956, pp. 4—6

新 刊 紹 介

前 野 淳 一 郎

森蘊著 日本庭園 〔創元社・創元選書、昭32、B6 248頁 アート写真155 図版18、¥600〕

著者は庭園史の研究家として25年にわたり古庭園の綿密な文献考証・実地検証に専念され、特に桂・修学院両離宮については注目すべき新知見を発表せられるなど、自他共に許す日本庭園史の権威である。本書は、著者の深奥を極めた歴史研究の成果と、その間培われた庭園意匠に対する見識を披瀝して、現代につながる「日本の庭園」のあり方を問うたもので、従来の日本庭園に関する著作（著者のものを含めて）とは異つた、ユニークなものがうかがえる。特に多くの写真・図版による過去の庭園の解説は、庭園鑑賞更に作庭に当たつてのヒントを数多く与えてくれる。造園専門家にとつても充分読みごたえのある本である。

鈴木忠義著・国際観光協会監修 自動車旅行の宿泊施設 〔理工図書、昭和32、A5 118頁 写真図版多数、索引、¥210〕

最近貸切バス乃至オーナードライブによる観光旅行が急速な成長を示し、それに対処すべき駐車場・休憩施設・ドライブインレストラン・モーター・ハイウエーホテル等各種路傍宿泊施設の整備が各地で要望されている。本書は夫等の計画設計・実施にあつての基本的な考え方を解説し、多くの設計例を示したもので、観光事業関係者のハンドブックとして甚だ適切なものといえる。